

三條別院のご案内

真宗大谷派二条別院

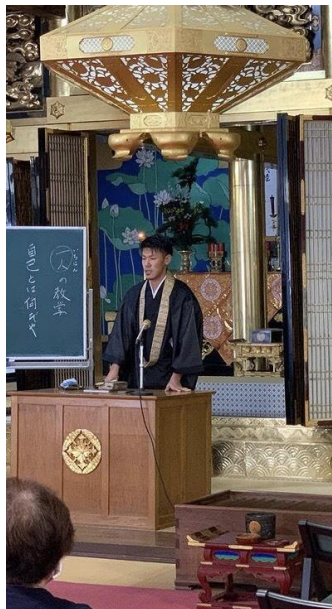
TEL : 0256-33-0007 FAX : 0256-33-2847

E-mail : sanjoribetsuin@wing.ocn.ne.jp

三條別院に想う

【特別編①オリンピックに想う】

▲二〇二二年七月二十三日、一年間延期されていた東京オリンピックが、感染症の流行がやまない緊急事態宣言下の東京で「無観客開催」となりました。八月八日までの日程で行われ、また、二十四日から九月五日までパラリンピックが実施されています。ハンドボール選手・コーチとして活躍された戸次輝氏（第十組超願寺）に、今回のオリンピックをどのように考えているか、執筆いただきました。



【第十組 超願寺 戸次 輝 氏】

一年“も”の延期を余儀なくされたオリンピック。多くのオリンピックファンたちにとって、この一年はとてつもなく長い期間だったに違いありません。この延期によって、競技生活を続けることが難しくなった者もいれば、反対に好機と

なつて出場を掴んだ者もいます。新型コロナウイルス（以下、コロナ）禍中でのオリンピック開催から今想うことについて、拙稿したいと思います。

想えば、二〇二〇東京五輪はトラブル続きでした。五輪ロゴの盗作問題に始まり、新国立競技場建設費の莫大化、そして組織委員会長の交代。また、最後の最後までコロナ禍での開催への賛否でした。断固開催を掲げ、スポーツのチカラを信じて止まないオリンピック信者たちの言い分に多くの人が首を傾けたことでしょう。

スポーツには、スポーツの「さ・し・み」という三大基盤があります。それぞれの頭文字を取った言葉です。「さ」は支える。「し」は知る。「み」は観る。これらを基盤としてスポーツは成り立っているという考え方です。スポーツは決してプレーする人たちだけのものではありません。「選手ファースト」なる考え方もありますが、スポーツへの関わり方というものも多様化しています。特に、オリンピックはボランティアの方々への支えがなければ始まりません。また、オリンピックを機に、新しいスポーツを知る、興味を持つということがあるかもしれません。そして、スポーツをしない人であっても観ると

いう楽しみを持つ者もいます。スポーツをしない人もできない人も何かしらで関わり合つてスポーツは成り立っているのです。

今回の二〇二〇（二〇二二）東京五輪は連日のメダルラッシュでしたが、同時にコロナ感染者は今なお増え続けています。その中で、日本代表選手の多くが勝ち負けに関わらず、このコロナ禍で五輪開催できたことへの感謝を口にしていました。感謝と尊敬の念を持ってプレーすることがまさにスポーツマンシップであり、その姿に観る者は感動するとも言えます。五輪選手たちの感謝や嬉しさ、お礼の言葉は、決して一人で戦っているのではないことに気付いたからこそ発せられるものだと思います。多くの人々が不安の只中にあり、それでもこうして五輪開催できたことは、その多くの人々の支えによってであると、まさしくおかげさまの心の実感です。

一方、お寺でコロナによる仏事法事の減少や縮小が一層目立つようになりました。このような状況下だからこそ、仏事法事の意義を再確認しなければなりません。「疫癘の御文」には、南無阿弥陀仏と申すその心を「御ありがたさ」「御うれしさ」「御礼のこころ」と表現しています。阿弥陀様の光に照らされている、そのおかげさまで私たちがいるのだと、これまでの当たり前な日常を奪われつつある今だからこそ再確認できるのではないのでしょうか。このコロナ禍に、私たちもおかげさまで今こうして生かされてい

ることをあらためて実感しなければなりません。そのことに私たち僧侶は、仏事を機縁として御門徒様と共に気付き、歩んでいきたいと思ひます。

戸次 輝 氏(第十組超願寺)

○次回の「三条別院に想う」は、

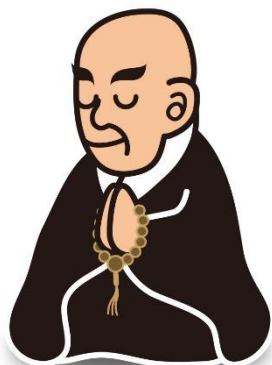
泉 美樹子 氏(第二十三組慶誓寺)より

「執筆いただきます」

【今回は特別編⑧新型コロナウイルスと薬について】

▲新型コロナウイルス感染症のワクチン接種がはじまり、また治療薬の研究もすすめられているという

ことで、薬学についての関心も高まっています。そんな中、ジェネリック医薬品の不祥事により、製薬会社からの通常の医療の薬の供給が滞る等、私たちの生活がいかに薬と密接な関係にあるか改めて考えさせられる昨今です。今回は現役の薬剤師で慶誓寺坊守の泉 美樹子氏に、新型コロナウイルス感染症流行下で考えられていることを執筆していただきます。



朝の人生講座報告

毎年、蓮如上人が最晩年に書かれた『夏(げ)の御文』四通拝読に併せて、三条別院では一般的には早朝の「暁天(ぎょうてん)講座」といわれる「朝の人生講座」を四日間、開催しています。昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で法話

が中止となりましたが、本年は感染症対策を徹底した上での開催となりました。二〇一七年からテーマを「生老病死」とし、順に「生」「老」「病」と進めて参りましたので、本年はこのテーマでは最終の「死」について、お盆明けの八月十九日から二十二日まで、それぞれ二十代、三十代、四十代、五十代僧侶にお話しいただきました。講師・講題は次の通りです。

十九日 藤田恵日 氏(第十八組 福泉寺)

※体調不良のため西村昌桐教区駐在教導が代わりに法話を行いました。

二十日 福田 瞬 氏(第十五組 善性寺)

「僧侶の役割は法務執行だけじゃない」

二十一日 戸次顕彰 氏

(第十組 超願寺、大谷大学講師)

「信仰と勇氣、そして感謝」

二十二日 井上正 氏(第十組 受徳寺)

「最後に何を話したろう」

新型コロナウイルス感染症により、多くの人には死がこれまでより身近に感じられるようになったのではないのでしょうか。これまで普通だと思っていた日常は、長期化する感染症の影響でむしろ特殊だったのではないかと思えてきます。



【西村駐在教導(右上)、福田氏(右下)、戸次氏(左上)、井上氏(左下)】

二十日の福田氏は、結婚を機に入寺されるまで介護士の仕事を十年続けられ、現在三条真宗学院で教師資格取得に向けて学んでいます。得度してからは三年目で、月参り等で出あった御門徒さんの介護をめぐる悩みに介護士の経験があったからこそ向きあえたこと、生まれたときは大勢で祝うのに、死んで行く時は何故家族葬等で少人数で勤める傾向にあるのか、大勢で最期は見送りたいと話されました。

二十一日の戸次氏は、釈尊の「四門出遊」の話で、生老病死に懊悩した釈尊が出家して覚りを得るきっかけとなったのは「沙門との出会い」

だったのであり、それが端的に表現されている
経典は『無量寿経』なのだとお話しされました。

經典の冒頭で、まだ覺りを得ていない阿難が釈尊が「光顔巍巍」とされているのに気づいたことは釈尊の沙門との出会いに等しく、さらに釈尊が菩提樹下で悪魔に修行を中断し世俗へ戻る誘惑を受けたとき「私には信仰と勇氣、そして智慧がある」と退けたというエピソードを紹介されました。まだ覺っていない釈尊が、何故仏教に対して「信仰がある」と言えたのかということが、生老病死の悩みと沙門との出会いに象徴されているのではと話されました。そして講題の「感謝」という言葉は、まだ若いご自身の友人が亡くなった際、言葉を失ってしまった中で、言えるのはあらためて「感謝」ということしかないのではないかと考えられたそうです。

二十二日の井上氏は、ご門徒さんが反抗期でおじいさんを亡くされた際に十三回忌で「最後に何を話しただろう」とつくづく考えられ、反抗期で身近な人の愛情や氣遣いが疎ましく思えたが、時間が経ち、あらためてそれに氣付けるようになること。反抗され、時には傷つけられる側の者は、その反抗すらも成長の証とうれしく思うこと、それは凡夫と阿弥陀如来の慈悲の關係と同じではないかと説明されました。

朝の人生講座は九月の秋彼岸にも開催されます。ぜひお参りください。

▲二十日の福田氏の法話と、二十二日の井上氏の法話をYouTubeの別院チャンネルで見ることが出来ます。

ぜひチャンネル登録をお願いします！



定例法話を慶讃お待ち受け事業として開催

毎月十三日の闍如上人のご命日（両度の命日）に行っている定例法話を左記の通り開催いたします。二〇二三年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年をお迎えします。

三条教区・三条別院では、慶讃お待ち受け事業として、「三条別院 定例法話（十三日御命日）」を通常より拡大して、開催いたします。

慶讃テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」のもと、宗祖親鸞聖人の「御誕生」と「立教開宗」の意義をたずねて参りましょう。

どなたでもご参加できます。皆様の御参詣お待ちしております。

◆講師

九月・二月 水嶋 聡氏（高田教区 光徳寺）

九月の講題「ただこのこと」

◆今後の講師

十月・三月 寺澤 三郎氏（北海道教区 教證寺）

十一月・四月 中山 善雄氏（教学研究所 研究員）

十二月・五月 澤面 宣了氏（長浜教区 浄願寺）

◆日時・日程

毎月十三日 午後一時半 お勤め・感話

二時 法話

三時半 座談

四時半 終了（予定）

◆持ち物・念珠、勤行本（赤本）、

略肩衣（お持ちであれば）、筆記用具

◆場所 三条別院 旧御堂

秋彼岸会・朝の人生講座

九月二十日から二十一日まで、三条別院秋彼岸会・朝の人生講座を勤修いたします。

九月の朝の人生講座のテーマは「食」。三条別院では昨年四月から職員が「三条エール飯」を継続しており、昨年七月からフードバンクも開始しました。感染症流行下でひとり親世帯の困窮がクロージアップされてきましたが、日本の食料自給率の低さの問題等も指摘され続けています。毎日食べ続けなければ命をつなぐことができないという単純な事実を前提に、各講師に、お聞きしてみたいと思います。

◆日時 九月二十日（月）～二十一日（水）

午前六時 晨朝 人生講座

午前十時より 日中法要（二十一日永代経総経）

午後一時三十分より 速夜法要

◆場所 三条別院本堂

◆講師

二十日 人生講座 手島 創氏（第二十二組順了寺）

「カフェに立ちて」

速夜法要 武樋 隆如氏（第十四組蓮光寺）

「安楽のとき」

二十一日 人生講座 関根 正隆氏（第二十二組長徳寺）

「仏事と食事」

日中法要（永代経総経・速夜法要）

平出 京子氏（高田教区願生寺）

「食へることつながる お寺の子ども食堂」

正午よりお齋あり（精進弁当※）

二十二日

人生講座 唐橋 聡氏（第二十三組照善寺）

「子ども食堂とお講」

日中法要 佐々木ひとみ氏（第二十二組福明寺）

「食は生きる糧」人間食へた物で作られる

▲(※)二十一日は本年十一月のお取り越し報恩講のために、三条料理業組合(魚長・きくや・小山屋・福海老・松木屋・二洲楼)に創作をお願いしている「御取越御膳(精進弁当)の試作品を冥加金二千円で提供します。ぜひお申し込みいただき、ご感想をお聞かせください。

申込期間：九月一日(水)～

九月十七日(金)

三条別院まで、電話・FAX・EMAILでお申し込みください。
(連絡先は表紙記載)



宗祖御命日のつどい

宗祖親鸞聖人の御命日であります毎月二十八日に、「御命日の集い」を本堂にて、日中法要と法話、その後、座談会の場を開いております。

なお、前日(二十七日)はお速夜法要を、午後一時三十分よりお勤めしております。

◆日時 九月二十八日(火) 午前十時より

◆会場 三条別院 本堂

◆お勤め(御命日) 日中法要

文類偈 行四句目下

念仏讃 洵五

和讃 回口 次第六首

回向 願以此功德

◎今月の法話講師

大久保州氏(佐渡組廣永寺)

御文五帖目 六通「一念に弥陀」

◆今後の講師一覧(御文五帖目)

- 十月 佐々木 祐玄氏(第十五組光善寺) 一通(八萬の法藏)
- 十一月 村手 淳史氏(第二十組光圓寺) 第十一通(御正忌)
- 十二月 北島 栄誠氏(第十一組長福寺) 第十通(聖人一流)

フードバンクを継続中

八月の別院でのフードドライブに

「協力いただいた御寺院・御門徒」

第十一組長福寺、第十八組行徳寺、第十五組専照寺、佐渡組門徒

その他匿名含め多くの方々にご協力いただき御礼申し上げます。次回引き取り予定日は九月二十四日(金)です。

その他の講座案内

○別院声明教室(全五回・途中参加可能・生徒募集中！)

〔月一回、午後六時～八時〕

八月二十三日(月)〔逸、九月十二日(月)、

十月十四日(木)、十一月十六日(火)、十二月十四日(火) 講習内容 真宗大谷派勤行集(赤本)

講師 廣河 暁氏(第二十一組光照寺)

参加費 五〇〇円/回

○別院書道教室(生徒募集中！)

〔月二回第一、第四水曜日、午後六時三十分～八時〕

講師 木原光威氏(新潟県書道協会理事)

月謝 二七〇〇円(テキスト代含む)

随時募集中

○庭講「毎月十三日」

「一緒に別院のお庭を整備していきませんか？」

○花講・三条別院有志の会

花講は別院の立花を、有志の会は別院行事に併せた奉仕活動や季節ごとの懇親会を行っております。

○三条別院巡回

三条別院から御本尊(絵像)をお迎えして、開法会を開催しませんか？

○別院奉仕研修冥加金の変更について

【奉仕研修冥加金】

一人あたり半日(午前または午後)五百円、一日千円
一泊二日は上記の冥加金に順じて半日五百円で計算する。

【その他実費でいただくもの】

- ①講師謝礼。なお、列座によるお内仏のお給仕・法話は研修冥加金に含まれる。
- ②シーツ等クリーニング代千円
- ③食事代(ご要望等ございましたらご相談承ります。)

◆◆編集後記◆◆

九月の「三条別院のご案内」をお届けします。

▼「三条別院に想う」では、戸次輝氏にご寄稿いただきました。ありがとうございました。▼

九月からの三条別院定例法話では、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃お待ち受け事業がはじまります。▼第一回目の講師、水嶋聡氏の講題は「ただこのこと」です。▼親鸞聖人は佐貫の地で、「名号の他には、何事の不

足にて」「真宗聖典」六一九頁」と、三部経の説話を中止されました。このことについて、竹中智秀先生は仏教の外道化と対決する問題に関わり、「実はこのことが、靖国問題とか「同和」問題とかを左右する問題とも関係している」

『竹中智秀選集第八巻』と書いています。▼最近、先輩の言葉から、あまりにも「特権」に無自覚で、都合よく安心できる言説に疑いを持たないでいる自分自身の姿を知らされること

がありました。▼親鸞聖人は何に苦悩し、何を聞きとられたのでしょうか。念仏申す「ひとり

(唯)この生活を共に学んでいきたいと思いま

す。(関崎)